

定子と彰子の物語

高田 友

藤原兼家に四男子あり。道隆・道綱・道兼・道長なり。道綱母は彼の「蜻蛉日記」の作者にして、本朝三美人の一に名を留むれど、出自輕きを以て、息をして出頭せしむる能はず。道綱また腑甲斐なき男にて、母の日記にもその旨の記載あり。長じて後、異母弟道長の勳を乞ひて追従す。

餘の三人は北家魚名流中正女時姫の所生なり。同母なれど、父の後繼を巡りて相争ふ。

兼家には攝關の地位を著しく高めたる勲功あり。九七八年右大臣。九八六年、一條天皇踐祚あらせらるるや、攝政に任ぜらる。位人臣を極めたりといへども、なほ官位は上に太政大臣藤原賴忠（從兄）、左大臣源雅信（道長第一夫人倫子の父）あり。これが下風に立つを肯せじとて、右大臣を辭し、史上例なき大臣を兼任せざる攝政とはなりたりけり。

一條天皇（円融皇子）は兼家の外孫、踐祚の砌は七歳にておはします。御名は懷仁。母は兼家女詮子。案外の儀なれど、外祖父の攝關に就任したるは、平安初期の良房に續く第二の例に過ぎず。餘は基經、忠平など皆帝の外舅（伯叔父）なり。兼家、時を移さずして、長子道隆を内大臣に任ず。これによりて、史上例なき四大臣の存する世とこそはなりたりけれ。すなはち、太政大臣、左大臣、右大臣、内大臣の謂ひなれども、從來いづれか一は闕官たり。

九九〇年は北家九條流（兼家父師輔の流れ）の中にて、兼家眷属の頭角を現はすを見る。道隆關白に任ぜられ、その息伊周藏人頭たり、また、女定子、十四歳にして、一條帝の後宮に入内す。時に主上十一歳。兼家、一族の繁榮を豫期しつつ、此年華麗なる人生の幕を閉ぢたり。

九九五年、道隆、弟道兼相次いで歿し、攝關の位を覓めて、伊周と道長に確執の生ずるあり。詮子、如何なる故ありてか道長を愛し、我が子一條帝（十六歳）にこれを關白に上げたまはんことを奏す。一に曰く、定子詮子の嫁姑、犬猿の仲なるに由りて、その兄に含む所ありしと。定子は優渥なる爲人を傳へらるれば、或は詮子の鬼姑なりしか。一條帝は定子を寵愛し給ふこと一方ならず、情に引かれて伊周を抜擢せんと欲して仰せたまはく、「道長はいまだ權大納言、伊周は弱年なれどすでに内大臣。關白は伊周たるべきか」と。詮子泣きて強請の儀ありしかば、帝つひに屈して宣ひけるは、「權大納言の關白たる、古今に其の例を見るなし。ただ、内覽の宣旨を下すのみにて可なりや」と。詮子應諾し、即座に宣旨を書かせ奉り、墨痕の乾かざるをピラピラと振りつつ、未だ宮中の一室に留まりたる道長の許へ馳せまかりけるとぞ。

内覽とは「主上に先んじて書類を閲覽する權利」にて、攝政關白に任ぜられたる機にその宣旨を下さる。今、先例を破りて、攝政關白に非ざる臣下に内覽の宣旨を與へたまふ。しかうして、道長の越階を許し、伊周を凌ぐ右大臣に任じ給ふ。

但、攝政關白に任ぜられざるに内覽の宣旨を蒙りたるはこれを以て嚆矢とするに非ず。曩に道隆死病を得たるとき、伊周「關白病間」に限るとの留保ありて、内覽の宣旨を受く。

時に（九九五）、道長三十歳、伊周二十二歳、定子十九歳。思ひきや、一條帝はいまだ十六歳、定子を姉の如くに慕ひておはしましき。また後に入内する道長女彰子は八歳なりき。

伊周、帝の寵を待みて、ことごと道長に諍ひを求む。をりしも道長の内覽を許されて間もなきに、公卿僉議の座にて、右大臣道長と内大臣伊周と激しく争論し、その怒声、内裏の外にまで響き互りたりとの由。

九九六年、「長徳の變」出來して、伊周終に己が墓穴を掘る。

先帝花山法皇、寵愛せる女御に先立たる。すなはち、兼家の弟爲光の女祇子なりき。今、落飾せられたりといへども、色を重んじ、傾國を思召したまふことなほ頻りにして、祇子の妹に通ずるあり。一方、伊周また祇子の別儀の妹に通ず。於此乎、伊周、法皇の通ひたまへるは我が思ふ人の許なりと誤認し、弟隆家を語らひて、法皇の牛車に矢を射かけ奉る。

一條帝、いかに我が掌中の玉なる定子の同胞なりといへども、これを看過する能はず、つひに二人を捉へ、伊周を大宰府、隆家を出雲に配流したまふ。檢非違使の追捕に向ひたるに、をりしも定子二條宮に宿下りするあり。伊周の居住せる二條第に隣接す。伊周とともに一室に籠り、兄の手を握りて放ち給はず、官人、中宮より科人を引き剥し奉るを得ず、捕縛するに兩日を要したりとぞ傳へらるる。

伊周と隆家の遠流ありしより一月も經ずして、定子落飾（出家）す。咫尺の間に兄の繩目に懸りたるを見つるの耻辱に堪へざりしなり。然而、主上の寵已むことなく、また參内して君側に侍れり。その後、三子を擧ぐ。中子は男子にして、敦康親王たり。

清少納言の定子に出仕したるは九九三年、時に定子は十七歳。數へ年なれば、現在の高校一年ばかりなり。枕草子に徴するに、己而漢籍に堪能、艶やかにして沈着なる風情あり。如何なる女性なりやと感嘆せられであるべしや。

道長、一旦屈服せしめたる敵には極めて寛容、怨恨を残さざるを以て身上とす。その馳走によりて、伊周も隆家も、翌年には京都に召喚せられ、罪を許さる。もはや道長に阿諛するの外なしといへども、漸くに昇進し、一〇〇八年には、儀同三司に任ぜらる、「儀を三司（三大臣）に同じうす」の意にて、大逆の罪を犯したるに不可思議なる高位に至る。小倉百人一首作者に「儀同三司母」とあるは、伊周母高階氏の謂ひなり。

隆家も、後年、再び台閣に連なる。一日、朝廷より退下せんとするとき、道長これに目を止めて、己が牛車に招き、ともに家路を辿る。道長、懷舊譚に耽りつつ、切々と語りて曰く、「長徳のをりは、遺憾なる結末とこそはなりたりけれ。陷奔に嵌められたりけんと思ひたまふなかれ。鷹は汝兄弟を救はんと盡力したれども、餘りの大事にて候へば、つひに如何ともするなかりき。遺恨を含みたまふなかれ」と。宜なるかな、君を弑せんと欲して、僅々一年にて赦免ありたるは、道長の配慮、寛宥なりと言はざるべけんや。さはさりながら、赦免の儀は、定子の皇女を生みたまひける慶事のゆゑなりとの裏話あり。

九九九年、道長女彰子（十二歳）、女御となりて入内す。主上二十歳。己而、定子（二十三歳）は中宮たり。然れども、道長の權勢旭日の中天に昇らんとするが如くにして、翌一〇〇〇年には、彰子を定子に並べて立后せしめんとす。

中宮とは皇后の異名なるに、今、道長は、己が娘を冊立せんがために、皇后と中宮を分離して、定子を皇后に棚上げし、空位となりたる中宮の位を我が娘を以て補ふ。一天皇に正妃の二人あるを以て「一帝二后」と稱ふ。

この年末、定子は嬖子内親王を出産し、産後の肥立ち便なきを以て、芳紀二十四にて早世す。帝は二十一歳、彰子は十三歳なりき。

定子は、脩子、敦康、嬖子の三子を殘す。

荒唐無稽の如くに聞ゆれども、定子所生の皇子皇女を養育したるは道長の係累なり。嫁は憎くとも孫はかはゆしといへり。兩皇女は東三條院詮子これを傍らに置いて溺愛せんとすれども、翌一〇〇一年には祖母四十歳にて逝世す。

敦康は道長と彰子と相提携して、これが哺育に任ず。あまつさへ丁重に傳くこと限りなく、敦康は容姿・學才・心映、極めて優れたる皇子に成長せり。彰子は我が子よりも慈しみたりとの由。源氏物語の桐壺を定子、源氏を敦康に比定する説あり。然則彰子は藤壺なりや。それがし、ふと、敦康の彰子に思ひを寄することなかりしかと夢想するの儀あらずんばあらず。彰子と敦康の齡、懸隔すること僅々十一。天の采配如何なりしにや、定子と彰子の齡も十一の違ひなりき。

道長の、敵ならんとも、一旦脅威薄るれば、すなはち舊怨を棄てて入魂たるは獨り伊周隆家のみならず、敦康にもまた然り。一には、彰子一〇〇八年に敦成親王（後一條）、一〇〇九年に敦良親王（後朱雀）の御誕生を見る以前は、外孫誕生のことなからんか、すなはち敦康を登極せしめ奉りて、外戚たらんと企みたるにあらずや。

一條帝は、一〇一一年病を得て、從兄三條天皇に讓位し、幾何も經ずして崩御あらせらる。三條帝は冷泉皇子におはしませども、これまた道長の外甥にして、姊・超子の所生なり（花山異母弟）。同母の皇弟に、和泉式部と浮名を流したまひし爲尊親王、敦道親王あり。

三條帝の踐祚に當りて、道長は敦成をして立太子せしめ奉る。このとき、彰子は、我がライバルの所生たる敦康こそ長兄なれば皇嗣たるべけれと異を立つれども、道長意に介するなし。彰子父を甚だ惡みたりと傳へらる。一條帝の素志、敦康に在りと承知したるに據りてこれを推したりとは彰子の慈悲の深きぞ察せらるる。

彰子のかく寛厚なりしは、一重に、傍らに紫式部ありて、教へ諭せるのゆゑなりと言ふ。式部の彰子に仕へたる始めは一〇〇六年（彰子十九歳）と傳へらるるが定かならず。清少納言とは相識るなきが如し。一〇一二年に致仕したるは、道長、己が陰謀に彰子の加擔するを厭ふは式部の使喚せる所なりと憾みて鹹首せりとの由。

敦康親王は、道長嫡子頼通（敦康より七歳年長）と肝膽相照す仲となり、頼通正室（具平親王女隆姫）の妹を室に迎ふれども、一〇一八年、二十歳にて夭折し給ふ。

道長薨去は一〇二七年（六十二歳）。上東門院彰子は長壽を保ち、一〇七四年曾孫白河帝の御世に八十七歳にて崩御あらせらる。すなはち今日皇室直系の祖にておはします。

（平成三十年二月十五日受附）